
忘却は死罪

鈴木

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘却は死罪

【Nコード】

N26930

【作者名】

鈴木

【あらすじ】

いじめられて、もう生きることがあきらめた女の子が出会った男の子は。

（前書き）

暗い話です。いじめが絡んでくる内容なので苦手な方はブラウザバックをお勧めします。直接的な描写はありません。

深夜。コンビニの前。蹲る女の子。それを見下ろす高校生の僕。
他者の目には、このように映っていたと思う。

お互いに学校の制服を着ていたがら、彼氏彼女のような関係に見えたかもしれない。

もちろんそんなことはなく、僕と彼女は初対面だった。

【忘却は死罪】

「何してるの」

ゴミ箱の横に蹲る私に彼が話しかけたのが始まりだった。

特に心配しているような口調ではなかったので、どうせその辺の不良がからかいに来たのだろう、と私は彼の問いかけを無視する。
すると彼は何も言わずにコンビニの中に入って行った。

単刀直入に言えば、私はいじめられていた。

原因はよく解らない。いじめなんて、大概そんなもの。

クラスの有力者が「なんとなく」気に入らない人を標的にして、集団攻撃する。それがいじめ。

少なくとも私はそう思っている。

そして、その「ターゲット」とやらに私になってから、もう2年がたつ。

最初は軽い無視とか陰口から始まり、今は教科書がシュレッダーにかけられたりとそれはもうひどい事をされている。

それでも、担任に告げる勇氣はなく、親にも明るく振る舞う事しかできなかった。

おかげで夕飯の時は、存在しない友人との楽しい思い出話を親に話す羽目になり、そのたびに胸を痛めた。

それでも、今日まで頑張ってきた。そして、今日でやめることにした。

コンビニの看板に、小さな虫がたくさん集まっているのが見える。私はゴミ箱の隣で蹲ったまま、貴方たちを見るのもこれで最後ね、と苦笑した。

夜空を見上げて、星ひとつない。どうせ今日が最後なんだから、いいものを見せてくれてもいいのにな、と私はふて腐れる。

視線を前の道路に移すと、車が勢いよく走っているのが見えた。乗っているのは夜遅くまで働いていたサラリーマンだろう。

今あそこに飛び込む事ができたらと一瞬思ったが、それでは彼らを厄介ごとに巻き込むことになるから無理だな、とあっさり諦める。

ウィーンとコンビニのドアが開く音がする。

その音に反応して無意識に出てきた人の顔を見ると、先ほど私に話しかけてきた男が立っていた。

彼も私の存在に気が付くと、片手に持っていたビニール袋から緑茶の缶を取り出して私に渡した。

「……なんですか」

私はその缶を見ないように膝元に顔を渦ませた。

「寒そうだからあげる」

「……いりません」

尚も顔をうずめたままじっとしていると、彼は私の左隣に回り込み、私と同じ様にその場に腰を下ろした。

暫く耳を澄ましていると、彼ががさごそと袋の中からもう一つ缶を取り出して開ける音が聞こえた。

それに気づいた私は顔をあげると、隣に來た彼の顔をまじまじと見る。

クラスメイト？いや、違う。見たことない。昔の友人？いや、そんなことない。

「なんでじろじろ見てるの」

そう言われ、はっと我に返った私は肩をすくめた。

「こっちじろじろ見ないでよ」

そう、何度も聞いたことのある女の声が脳内で再生される。

私はそんなにじろじろと見ていたのだろうか。そんなつもりはなかったのに。

「ねえ、僕の話聞いてる？無視しないでよ」

”無視してんじゃないよ”

違うでしょ、いつも無視をしているのは貴方じゃない…私はいつだって耳をそば立てているもの。

また何か言われていないかな、ってびくびくしながら過ごしてるんだもの。無視できるわけじゃないじゃない。

貴方たちこそ、私の言ってること何一つ聞いてくれないくせに。私は友達になりたいだけなのに。

ああほら、涙出てきた。

「何泣いてるの。ちよつと、僕が泣かせたみたいじゃん。やめてよ
なくの」

”泣いてんじゃないの？バカみたい”

馬鹿よ。何を基準にバカなのかよく解らないけど、きつと貴方たち
にとつて私はバカなんでしょう？だから無視したりするんでしょう？
泣くのは仕方ないじゃない。辛いんだもの。もう、いやなんだもの。

「ねえ、緑茶飲まないわけ？」

緑茶なんて、緑茶、え？

「飲まないの？カテキンたっぷりなんだけど」

「え……」

隣の男の子の言葉と自分が過去に言われてきた言葉を重ねて聞いて
いたのだと気づき、自然と涙がほろほろと落ちた。

「ねえ、ほら、ねえ、ちよつと、泣かないでよ、困るんだけど」

そう言つて彼は無理やり自分のシャツの裾で私の涙をこしこしと拭
いた。

それから緑茶を私の足元に置いて、飲めとでも言いたそうな目で私
を見た。

「どうして見ず知らずの私に構うんですか……。からかうのなら他
でやってください……」

「だつて、死にたそうな顔をしていたから。別にからかつてるつも
りはないよ」

「え？」

「今にもその大通りに走っていきそうな顔をしてコンビニの横に
蹲つてたから」

「私そんな顔してたの……」

「してたよ」

そろそろ彼の視線が痛いので、足元に置かれた緑茶の缶を取り、ふたを開けた。
すると暖かい蒸気が缶の中から出てきて、私は無意識に口元を緩めた。

「私ね、あなたの言う通り、死にたいと思っているの」

両手で暖かい缶を持ちながら、うつむき加減にそういった。

「どうして」

「もう耐えられないの。辛い。すべて忘れたい。もう、生きていたくない」

「忘れたいの？」

「うん」

私がそう返事したのを聞くと、彼は突然立ち上がって私を見下ろした。

彼が右手に持っていた缶コーヒーはいつしか宙を舞い、ゴミ箱の中へと落ちて行く。

「忘れられればいいんだろう？死ぬ必要はないじゃないか」

「そう簡単に忘れられたら苦労しないよ」

そう言って私は彼を見上げ、苦笑した。

すると突然彼の右手がどんどん私の方に迫ってきて、ついには額に触れた。

彼は手を当てたまま私の目線まで腰を下ろすと、表情を壊すことなく淡々と話を続ける。

「僕が背負ってあげるよ」

「え？」

「君はすべて忘れてしまいたい。そうなんだろう？」

「うん」

「だったら僕がすべて背負ってあげるよ。君は力を抜いて、笑って生きればいいんだ」

そう言ったのとほぼ同時に、それまでピクリともしなかった彼の表情が温かな笑顔へと変わった。

その優しい表情に見とれた私は名も知らぬ目の前の男に惚れ、次の瞬間その恋心と自分の過去をきれいさっぱり忘れた。

【忘却は死罪】

深夜。コンビニの前。横たわる女の子。それを見下ろす涙目の僕。

他者の目には、このように映っていたと思う。

お互いに学校の制服を着ていたがら、彼氏彼女のような関係に見えたかもしれない。

もちろんそんなことはなく、僕と彼女は初対面だった。

そして、初対面にして僕は彼女の記憶を消した。

(後書き)

僕〃他人の記憶を自分の脳内に移送できる男の子。

タイトルは自作ではなく、お借りしたものです。

↓Is it out of order? (<http://out.blue-glim.com/>)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2693o/>

忘却は死罪

2010年10月12日02時28分発行